

2. サービス・ラーニングの進め方（基本的なステップ）

具体的なサービス・ラーニングの進め方を以下に紹介します。Service Agency（サービス・エージェンシー）とは、サービス活動を実際に提供する受け入れ先のこと、具体的には福祉施設やボランティア団体・NPO・NGO などのことです。

もちろん、大学がイニシアティブを取って社会問題解決のためのプロジェクトを立ち上げ、そこに様々なアクターに関わってもらう形もありますが、ここでは Service Agency の活動に参加するプログラムを取り上げます。

(1) サービス・ラーニング実施のための準備

1-1. サービス・ラーニングのカリキュラムの位置づけを明確にする

サービス・ラーニングを実施する学校がそのカリキュラムを通して社会にどのような貢献をしていきたいのか、そして学生にどのようなシチズンシップ（市民性）を獲得させたいのかを、まず先生方が話し合い、共有していきます。特に学校長の理解と支援を取り付けることが大切です。

1-2. バックアップ体制を作る

ボランティアセンターや活動支援室を設置し、学校と Service Agency との間のコーディネーター的役割をする人を配置します。サービス・ラーニングの効果的な実施のためには、教師だけでなく事務当局のコミットメントが不可欠です。

1-3. 受け入れ先のリサーチ・選定

地域のボランティアセンターや市民活動センターなどと連携し、受け入れてくれる Service Agency の情報を集め、適当なところを選びます。

1-4. Service Agency との提携

サービス・ラーニングの目的やコンセプトをきちんと理解してもらうとともに、学生が Service Agency で活動することによって、双方にどのようなメリットが生じるのかということと共に考えます。学校と Service Agency が Win-Win の関係にならなければ、継続的なサービス・ラーニングの実施は困難です。簡単なメモランダム（契約書）を交わすことも必要でしょう。

1-5. カリキュラム・授業計画の作成

どのような学科学習との関連性があるのかを考え、教師側としての教育目標を設定します。

(2) ガイダンス・オリエンテーション・事前学習

2-1. 学生に対する最初のガイダンス・登録

サービス・ラーニングの目的、市民性（シチズンシップ）が必要とされる社会的背景などを学び、一人ひとりが「Active Citizen」になっていく重要性を理解してもらいます。この時、学校としてのサービス・ラーニングの位置づけも説明します。その上で、活動先の Service Agency を選び登録します。

2-2. 「市民」とは何かを考える（事前学習①）

身近な人から歴史上の人物にいたるまで、自分が「Active Citizen」だと考える人を選び、その人について調べてきて、発表するというワークショップを行います。このワークを通し、抽象的な「Active Citizen」というものを具体的にイメージするとともに、「自分も頑張ろう」というモチベーションを高めていきます。

2-3.問題解決の基本的なフレームワークを学ぶ（事前学習②）

サービス活動そのものが目的なのではなく、あくまで何らかの社会問題が解決される、もしくは状況が改善していくことが目的です。その問題解決のための基本的なフレームワーク（枠組み）や手法を学びます。また、社会の問題を自分に引き付けて考えることを通して、当事者意識（オーナーシップ）を高めます。

2-4.Service Agency が取り組む社会問題についてのリサーチ

同じ Service Agency で活動する人がグループになって、取り組んでいる社会問題についてのリサーチを行います。

2-5.目標設定

個人の学習目標の設定を行います。

2-6.リスク・マネジメント、マナー講座

事故や事件が起こった場合の学校側の緊急連絡先と対応者を明確にし、ボランティア保険には必ず加入します。また、マナー講座などを行う方がベターです。これも一種のリスク・マネジメントだと言えます。

(3) Service Agency での活動

3-1.プロジェクトに関するオリエンテーション

以下のような説明を受けます。

- 何のためにやっているのか？（Service Agency のミッション）
- 「誰のためにやっているのか？」（顧客／受益者）
- 何をやっているのか？（具体的な活動内容）
- 活動上の注意事項

3-2.目標設定

参加するプロジェクト全体の目標（ゴール）の設定を行います。この目標設定に学生が参加し意見を出せるような場を設定することで、学生がより強いコミットメントを持って活動に参加することが期待できます。

3-3.活動中

一日ごとに個人目標を設定し、活動が終わったら振り返る時間を必ず取ります（→ワークシート・活動ダイアリー記入）。こまめに振り返り、修正・改善していくことが大切です。活動が伸び伸びにならないように、スケジュール・時間管理はしっかりと。

活動が長期にわたる場合などは、必要に応じてボランティアセンター・支援室なども協力し、学生に対するメンタリングや Service Agency に対するモニタリングを行います。中間発表などを行うのも一つの方法です。

3-4.振り返り・評価

プロジェクトそのものの評価を Service Agency 関係者と一緒に行います。

- 受益者・参加者への影響（どういふ変化があったのか？）
- 地域／社会への影響（どういふ変化があったのか？ どのような波及効果が見込まれるのか？）
- Service Agency への影響（ミッションの実現にどのように貢献したか？）
- 設定した目標（ゴール）の達成度はどうか
- プロジェクト運営に関してよかった点と改善点 …など

3-5.レポート・感想文提出

以上のふり返り・評価を踏まえ、レポート・感想文を Service Agency に提出します。可能な限り、Service Agency 側からも評価していただきます。

(4) リフレクション・発表・社会への発信

4-1.レポート作成・ワークシート記入

個人の学習目標に対してどうだったかをふり返ってレポートを作成するとともに、ワークシートに記入しながら自己評価をしていきます。

4-2.プレゼンテーション・ディスカッション

行った活動・活動の成果・それを通じた学びなどを一人ひとりが発表し、それを基に討論・考察を行います。ここで重要なのは、学生が、授業で学ぶアカデミックな理論とフィールドで得た活動の体験との間を結び付けられるように（理論→体験という演繹、体験→理論という帰納）積極的に助言していくことです。この役割をするのが、教師やその他のスタッフであり、すでにサービス・ラーニングを受講した先輩がファシリテーターを行うのも効果的です。

4-3.情報発信（提言）

サービス・ラーニングの成果を社会に向けて、情報の発信や提言をしていきます。その際に、「誰に」「何を」伝えたいのかを明確にし、そのためにはどのようなメディア（マスコミ媒体、チラシ、ウェブサイト、ブログ、口コミ…）を活用するのかを考えます。

他者に伝えるためにアウトプットするプロセスを踏むことで、学習した内容や活動の成果がより明確になります。

4-4.顕彰

可能ならば、社会・受益者からの評価・顕彰の場を持ちます。自分の行ったことが社会のためになった、受益者に喜んでもらえたというフィードバックは、今後の活動の継続へのモチベーションになり、自己尊厳感（セルフ・エスティーム）の向上にも繋がります。

(5) 成績評価・サービス・ラーニングプログラムの評価

5-1.誰が、何を成績として評価するのか？

- 自分自身 …設定した学習目標に対してどうだったか？（ワークシートを参考に）
- Service Agency …活動中の時間厳守、責任感、適応性、協調性、取り組んだ社会問題に対する認識度など
- 教師 …事前リサーチの取り組みや活動の成果、レポート、プレゼンテーションを通して、設定した教育目標がどの程度達成されているのか？

これにコーディネーターの評価や、同じグループの学生同士の相互評価（コミュニケーション能力などに対する）を組み入れるのも面白い試みです。

5-2.Service Agency に対するフィードバックとヒアリング

プログラム終了後、学生の感想やレポートをコンパクトにまとめて（そのまま送っても読まないことが多いです！）Service Agency にもフィードバックします。また、学生を受け入れてみてどうだったかという感想・意見・改善点などを、Service Agency からヒアリングします。もちろん、感謝の気持ちを伝えるのも忘れてはいけません。

サービス・ラーニングは多くの場合、Service Agency にとっても負担が大きいものです（うまく学生の力を活かせ

れば、効果も大きいのですが）。

また、学校側として、Service Agency の評価をしておくことも重要です。

5-3. サービス・ラーニングプログラム全体の評価

- 学校におけるサービス・ラーニングの位置づけ（目的・目標）に対してどうだったか？
- どのような社会的価値を創造したか（社会に貢献したか）？ →Service Agency の選定・連携について
- どの程度学生の市民性獲得に繋がったか？ →プログラム一つひとつのステップの検証
- 運営・コーディネーション →様々なステークホルダー（利害関係者）と円滑に進められたか？ コストパフォーマンスはどうだったか？

以上の項目を落とし込んだチェックリストやレポートのテンプレートを作成します。

5-4. 次のプログラムへの申し送り・共有化

プログラム終了時に教師やコーディネーターは、次のプログラムを運営する人向けに申し送りレポートを書きます。次にサービス・ラーニングプログラムを行う人は、必ず前の申し送りレポートを読むようにします。

そして、プログラムで使う様々なツールとともに共通のテンプレートでデータベース化して共有します。

5-5. 教師・コーディネーターへの評価とインセンティブの付与

以下はアメリカの大学での取り組みです。

従来は大学教師の昇進や終身雇用（*tenure*）において研究業績と教育が重視されてきたが、最近では地域社会への貢献度も従来に増してより重視する大学が増えてきている。現にフロリダ州などでは昇進や終身雇用において従来の方法と、教育と地域社会貢献度だけの2本立てのいずれかを選択できる方法を導入することも検討されている。

『大学とボランティア』（財団法人内外学生センター）より

サービス・ラーニングは通常の授業に比べ負担の大きい取り組みであるため、それをきちんと評価していくことが教師のバーンアウト（燃え尽き）を防ぐことに繋がります。

学校の公民的使命

米国の市民学習・参加の情報と研究センター（※）とニューヨーク・カーネギー・コーポレーションが、2002年に公民教育プログラムの構成要素を検討するために全米の専門家、研究者を集め、報告書『学校の公民的使命』をまとめました。

この報告書では、学校の基本的使命を「青少年が大人になったときに民主主義に十分参加する準備をさせること」であると定義しており、わが国における教育論議に欠ける視点を提起しています。つまり、民主的市民社会の運営主体の形成こそが学校の基本的使命であると考えており、このことはまた社会奉仕活動かボランティア活動かの論議を超えた根拠をも提示しています。

つまり、学校は学生の学力をつけるだけでなく、社会人・市民としての人間形成をする場としての役割と責任を有しているのです。学生の人間形成を支援するためには、社会を経済的・文化的・倫理的な面で発展させていくために、学校で学ぶ知識を活用していく場を提供していくことが求められます。

※The Center for Information & Research on Civic Learning and Engagement (CIRCLE) <http://www.civicyouth.org>